

2017年6月26日

第36号

全労連

全労連
憲法・平和グループ

憲法 平和闘争ニュース

核兵器禁止条約交渉会議傍聴・ニューヨーク行動に
全労連から 10 名が参加

核兵器禁止条約へ、世界は、いま動いている！ 「日本政府が、この場においてくれたら・・・」と

「共謀罪」強行採決への怒りを胸に出発。6月15日～20日、核兵器禁止条約交渉会議・第2会期(6/15～7/7)の傍聴と、女性平和行進などのニューヨーク行動に、原水協代表団として、全労連から10名が参加しました。まさに、「そのとき、歴史が動いた」という場に立ち会わせてもらったという行動でした。世界は、確実に、核兵器禁止・廃絶へと動いていることを実感しました。以下、長尾副議長の報告です。

6月15日(木)、「共謀罪」の成立が強行された怒りの日、成田から出発。参加者の胸は、委員会採決抜きの本会議採決という「中間報告」などという民主主義破壊の手法で「共謀罪」を強行した自民・公明・維新への怒りでいっぱいでした。国際的な懸念や批判も無視して、憲法違反の「共謀罪」を通した安倍政権は、核兵器禁止条約交渉会議にも参加せず、世界の流れに背を向けています。日本政府は、唯一の戦争被爆国であるのに、この会議に参加していません。私たちは、NGOとして、「日本政府は参加しないが、日本の国民の多くは、この条約ができることを歓迎している」ことを国際社会に伝えなければならないし、この条約が少しでも良いものになるように意見を表明してこようと、決意して出発しました。

＜6月16日(金) 国連・核兵器禁止条約交渉会議を傍聴＞

国連本部第一会議室での交渉会議を、10時～13時まで、傍聴しました。参加している政府の数は、100を超えています。アメリカなど核兵器を保有する大国の圧力に屈せずに来ているのです。そして、法的拘束力のある『核兵器禁止条約』を、より良い条約にしようと真剣に討論が行われていました。その日は、条約前文の後半部分が議題でしたが、一つ一つの文言を丁寧に議論し、各国の意見を寄せ合って条約をつくっていることをこの目で見ました！もちろん、どんなに小さな国も対等に意見を言います。そして、NGOも対等に発言できる民主的なルールのもとで、

核兵器禁止条約が作られています。このような民主的な営みが、戦争違法化、核兵器違法化の流れをつくっているのだと実感しました。

議論のなかでは、◆「核兵器廃絶につながる」という文言を前文に、◆「NPT 6条や国際司法裁判所の勧告的意見を受けて、すべての国が核廃絶に向かって努力すべき」と記述を、◆禁止項目に「核兵器の運搬手段」を入れるか？◆禁止項目に「研究」については？◆複雑にしない、◆「核兵器の使用」及び「核兵器による威嚇」を非合法化することを追加しよう、「核抑止力論」を違法化しよう、◆核兵器の持ち込み・通過・開発・保有・生産・使用などすべて禁止する、◆ヒバクシャの苦難と行動について書かれていることを評価、◆核実験被害者についても記述を、◆核軍縮の進行が遅いことへの不満（核保有国への不満）を述べるべき、◆環境破壊への影響を述べるべき、◆平和教育について記述すべき、などと、どんどん、意見が出されます。そして、「7月7日に、核兵器禁止条約として採択しよう」ということは、どの国も了解済みです。

その熱気ある会議に、JAPANの席が空席であることは本当に悲しいし、恥ずかしいものでした。しかし、会議場で、これまでに集めたヒバクシャ国際署名 296 万人分の目録を、被爆者の代表から、ホワイト議長、中満上級代表に手交し、日本のとりくみを伝えました。

《6月16日午後①》 ドゥアルテさんと日本代表団との懇談会

セルジオ・ドゥアルテさん（元・軍縮問題担当国連上級代表）は、昨年の国連総会決議で開始された条約交渉会議の意義を以下のように話しました。

「世界は非保有国が圧倒的であり、核兵器保有国は9つの国のみ。禁止条約によって、強力な倫理的力をもつ。草案については、第一に軍拡交渉の進展がないことが問題であること、第二に人



道的面から交渉が始まったことが、その中身となっている。壊滅的破壊的影響を日本ほど知っている国はない。核兵器禁止条約は、現条約（NPT・非核兵器地帯条約など）を妨げるものではない。NPTの義務を保有国は果たしていない。同盟国の政府の態度を変えるために、市民社会の役割は大きい。

昨年の国連総会では 123 か国（非保有国・非同盟国）が決議を採択し、この交渉会議がスタートした。3月の第一会期、日本政府は初日に参加したのみ！オランダは NATO 同盟国だが、第2会

期も参加している。

この条約について、『禁止条約に反対する国には適用されないので、意味がない』と言う人もいる。しかし、保有国が参加しなければ、意味は低下するが、無意味にはならない。条約は、『核兵器は禁止されるべきである』という道義的基準を示すものになる。保有国が受け入れなくても、国際法の条文になる意義は大きい。

《6月16日午後②》女性交流会

日本から15人、アメリカから13人が参加し、SEIUから差し入れられたフルーツと飲み物をいただきながら、交流しました。WILPFやおばあちゃん旅団など、アメリカ女性平和運動の「敷布団」的な方々が、今回の「女性行進」の中心になっていることがわかりました。日本からは安倍政権のひどさを説明しましたが、アメリカの皆さんのトランプの下でのたたかいと共感しあうことができました。最後に、「今、福島はどうなっているのか。沖縄はどうなっているのか」と質問され、長尾が答えました。それに対して、脱原発運動や沖縄の米軍基地をめぐる問題で、「連帯してたたかおう」と決意が表明されました。最後に、「フルーツの種のように、命をつなぐ活動を連帯して強めていこう」と確認し合って、記念撮影しました。



《6月17日午前中》署名活動

班ごとに署名活動をおこないました。私の3班は、ブライアントパークの入り口で行動。横断幕をはり、原爆写真を並べて、青年が作った大きな折り鶴も並べた。反応は、「日本より、足が止まり、関心を持ってきている」というのが、参加者の感想。3班は35分間行動して、署名は35筆。ちなみに私は19筆。代表団全体では174筆でした。



《6月17日午後》 女性行進

激しい土砂降りの中、ブライアントパークからハマーショルド広場へ行進。参加者は約1000名。沿道の人たちの反応はとても良かったのですが、とにかくすごい雨。ハマーショルド広場では、バケツをひっくり返したような雨の中で集会。リレートークでは新婦人の笠井会長が日本の運動を発言し、被爆者の和田さんが被爆体験とヒバクシャの思いを発言しました。交渉会議のホワイト議長が、雨の中、ジーンズ姿で駆けつけてくれ、296万筆の署名を届けました。



集会の最後にやっと雨が上がった。滝で休業したみたいな状態で、もう笑うしかない。

《6月18日 午後》 国際フォーラム

午前中、班ごとに観光して、午後は、「国際フォーラム・・・ひとつのたたかい、多くの戦線、

核兵器、戦争、壁、温暖化にノーを」に参加。主催は、「平和と地球」。ブルックリンの集会場で開かれました。日本からは、第一セッション「生存者の抵抗：人道的結末」で箕牧智之さん（日本被団協）、第三セッション「核軍縮のための組織：先頭に立つ青年たち」で弘中孝枝さん（民青広島、被爆三世）、第四セッション「禁止条約のその先へ」で高草木博さん（日本原水協代表理事）が発言しました。

**7月6日 12:00～13:00 新宿西口 宣伝行動
日本全国で行動を起こしましょう。**

＜最後に＞

ニューヨークでの三日間、原水禁の方たちも、ほぼ一緒に行動しました。「戦争させない！ 9条壊すな！ 総がかり行動実行委員会」で共同行動を積み重ね、ヒバクシャ国際署名も一緒にとりくんできました。2015年のNPT行動と比べたとき、この間の「総がかり」の共同の力を実感したところです。

出発した6月15日、「共謀罪」法案の採決が強行され、「日本政府を変えなければ」という思いをもってニューヨークに行ったわけですが、国連で、さらに、あらためて「日本政府を変えなければ」と誓いました。「世界は確実に動いている。戦争を違法化し、さらに核兵器を違法化する条約の成立が目の前に来ている。小国も対等に発言し、NGOも対等に発言する、民主的な討論の場で、よりよい条約をつくろうと知恵を出し合っている。まさに『そのとき、歴史が動いた』』というような場に立ち会うことができた。」そんな感動を得た行動でした。

最後に何度もしつこいですが、「交渉会議の場に日本政府代表がいてくれたら」と、思います。

（文責・長尾）

核兵器を禁止する女性行進もりあげよう 世界各国からの青年が交流会



6月16日夜、ゴダードコミュニティセンターにて、核兵器禁止条約交渉会議に世界各国から参加している青年たちによる交流会が行われました。原水協代表団から22人が参加し、全体では約40人が参加しました。

冒頭、主な団体の自己紹介の後、3グループに分かれて夕食をとりながら経験交流や若い世代を運動に組織する上での課題などについて議論しました。

その後、17日の「核兵器を禁止する女性行進」で使うプラカードやデコレーションなどをみんなで作りました。日本からの参加者は、模造紙をつなぎあわせて大きな折り鶴をつくり、そこに交流会参加の青年にメッセージを書いてもらうなど交流を深めました。事務局で確認できた参加者の出身国は、日本、アメリカ、スコットランド、フランス、オランダ、オーストリア、トルコ、インドでした。（文責：日本原水協 梶原渉）